

(翻訳：李へり)

## 日本遠征を巡る高麗忠烈王の政治的意図

金甫杓

序文

1. 日本遠征の進行の過程
2. 日本遠征に対する高麗の態度：日本招諭及び第1次征伐時期まで
3. 第2次征伐を巡る忠烈王の意図

最後に：結論に代わって

序文

モンゴル帝国の登場と拡散という世界史的な事件は、モンゴルが高麗にも侵出することで高麗に絶大な影響を及ぼした。モンゴルが高麗に影響を及ぼした期間は、「抗蒙」と言う戦争時期と「干渉期」と言われる戦争後の時期に大別することができるが、1219年から14世紀半ば以降まで約200年という期間にわたる。二回にかけて進められた「日本遠征」は二番目の時期に当たる。これは、モンゴルが高麗に日本の降伏を取ってくるように招諭を要求したが、招諭に失敗した後、モンゴルが高麗を引き連れて直接日本征伐を推進させた征服事業であった。

これまで「日本遠征」という事件は、モンゴルが主導し高麗がそこに動員された戦争と理解する傾向が強い。筆者は、この遠征に高麗が動員されたという事実を否定するわけではない。ただ、筆者が注目したのは、忠烈王の立場が第1次遠征と第2次遠征の間に消極的回避から積極的加担へと変わっていくことが見過ごされてきたということだ。そこで、この論文では、態度の変化に秘められた忠烈王の意図や政治的な狙いが何なのかをまとめてみようと思う。

最近の研究トレンドでは、高麗が一方的に日本の征伐に動員されたことを強調する傾向から離れ、この事件を高麗がどのように活用したのかという部分に注目している。こうした立場は、大きく二つに分けて考えることができる。一つは主にイ・ミョンミによって研究されたもので、高麗王がモンゴル帝国の威を借りて王権を確立し、国王の地位を確固たるものにしようとする意図から態度の変化が現れたということだ。結果的に、日本遠征推進組織である征東行省の丞

相を忠烈王が兼ねることになり、国王の地位が確固たるものになったというのである。もう一つは、モンゴル帝国で駙馬（皇帝の娘婿）という位置づけを確保することになった高麗王、つまり忠烈王の立場による「助軍の義務」を積極的に活用したという点である。この二つの見解に多少の違いはあるが、忠烈王がモンゴル帝国の丞相と駙馬（皇帝の娘婿）などの要素を通じて政治的な効果を期待したという点では共通しているといえる。

ここでは、忠烈王の立場をもう少し具体的に見るのにその目的がある。

## 1. 日本遠征の進行過程

高麗が日本遠征に参加することになったきっかけは、モンゴルの使節団を案内して、日本を招諭させる役割を担ってからだ。1266年(元宗7)モンゴルがヒズル（黒的）と殷弘を使者として日本に派遣し、高麗に彼らを案内させた。案内役として宋君斐、金贊らが護送を担当したが、巨済島に至り風浪の険しさを理由に帰朝した。その翌年にモンゴルは、日本招諭を高麗に委任し高麗は潘阜を派遣して、モンゴル及び高麗の国書を持って日本に行くことになったのだが、日本がそれを受け入れず成果をあげられなかった。その後、10数回にかけてモンゴル人と高麗人が日本に派遣されたが、拘留されたり殺害されモンゴルの日本に対する外交的な招諭は失敗した。

計6回にかけた使節団の派遣が失敗すると、モンゴルは日本を直接征伐しようとした。これに高麗に戦艦の造船を命じ、黒山島をはじめ高麗の南端にモンゴルの官吏を派遣して地形を偵察させた。また、軍糧を確保するという名目で高麗に屯田を設置し、1271年(元宗12)にはその経営のために屯田経口司を設置してモンゴル軍を鳳州・金州・鹽州・黃州・白州・海州など、10ヶ所に派遣した。高麗は戦争による荒廃化の中でもモンゴルの要求に応えるために努力せざるを得なかった。

1274年6月、とりあえず日本遠征の準備が整った。こうした準備過程を経てついに東征都元帥府の忻都（きんと）と洪茶丘（こうちゃきゅう：ホン・タグ）が率いる蒙漢軍25,000名を中心に第1次日本遠征が断行された。ここには高麗も金方慶を都督使として兵士8,000人、船頭6,700人、そして艦船900艘を準備して参戦することになった。第1次遠征当時、博多一帯での最初の戦闘でモンゴルと高麗の連合軍は勝利を収めたが、戦争の結果は逆に敗北であった。この時、金方慶が率いる高麗軍は博多一帯で勝ち続けていた。日が暮れると、忻都は一旦退却することを主張し、金方慶はこの勢いに乗じてもう一度闘うことを主張した。しかし、忻都の主張通りにモンゴルと高麗の軍隊は一旦退却することになった。周知のようにこの時の退却は連合軍の敗北につながる決定的瞬間であった。とにかく、モンゴルの主張に従ったばかりに第1次遠征は失敗に終わり、帰らぬ人となった人たちも13,500人に達する被害を被った。ここで注目すべき部分は、高麗とモンゴ

ルの指揮部との間に戦勢に対する判断と対処について見解が食い違っていたということだ。

第1次日本遠征が台風で戦争をすることもできず失敗に終わっても、モンゴルのクビライはその計画を諦めず、また日本に宣諭使を派遣する一方で、戦争の準備を続けて指示した。そうして、1279年（忠烈王5）に南宋を完全に征服し、ある程度余力があると、日本遠征にもっと拍車をかけるようになった。この時、高麗は南側の延辺を侵略し始めた倭寇の退治及びモンゴル帝国内での地位を強化するために積極的に参加した。これにより、忠烈王は日本遠征の推進機関である征東行中書省の丞相に任命され(1280)、高麗に駐屯している忻都・洪茶丘などのようなモンゴルの武将たちの横暴さをある程度抑制することができた。

しかし、高麗はまた大きな負担を抱えるようになった。この時、高麗は兵士10,000人、船頭15,000人、艦船900艘、軍糧11万石をはじめ、多くの兵器を準備することになり、そのため国のすべての生産力を動員するしかなかった。第2次日本遠征は、高麗に位置している征東行省麾下の高麗軍、蒙漢軍及び中国の江南地方に位置している征日本行省麾下の江南軍さえも全力をかけて日本を攻撃したが、台風に会い10万万人の損失を出したまま失敗に終わってしまった。

## 2. 日本遠征に対する高麗の態度：日本招諭及び第1次征伐の時期まで

ここで筆者が注目するところは、高麗の態度である。まず、日本に降伏を勧めなければならぬ初期の状況をみてみよう。

1) 1267年の春、正月宋君斐と金贊がモンゴルの使節団と共に巨済島の松辺浦に到着して風浪の險阻を見て怖がって引き返してきた。王が宋君斐にもう一度ヒズル（黒的）を遂行してモンゴルへ派遣し、(モンゴルの皇帝に次のように)報告させた。「詔書でお話された使節団を案内して日本と友好関係を結ぶ件に関しては、陪臣の宋君斐と金贊らを派遣して、使節団を遂行させました。巨済島に到着して遠く対馬を眺めていると大きな海が10,000里にもおよび、波浪が天にまで届くのをみて『こんなに危険なのにどうやって上国の使節団を案内して危険を恐れず進んでいけるだろうか。たとえ対馬に到着したとしても彼らは頑なで荒々しく礼儀を知らないので、もし不慮の事故にあえば、将来どうすべきか』とあって共に引き返してきました。また、日本は本来私たちとは外交関係がなく、ただ対馬の人たちが時折貿易をするために金州(今の慶尚南道金海市)を往来するだけでした。我国は、陛下が即位されてから仁徳を得て30年戦争の末にやっと息を吹き返すことになり、やっと延命しております。

(クビライの) 聖恩が天大にして、誓って功を立てて恩に報いたいです。もしできることな

のに心身を尽くさいのだとすればお天道様が我々を見ていることでしょう」と言った。〔(丁卯)八年 春正月 宋君斐・金贊與蒙使，至巨濟松邊浦，畏風濤之險，遂還。王又令君斐，隨黑的如蒙古，奏曰，“詔旨所諭，道達使臣，通好日本事，謹遣陪臣宋君斐等，伴使臣以往。至巨濟縣，遙望對馬島，見大洋萬里，風濤蹴天，意謂‘危險若此，安可奉上國使臣，冒險輕進？雖至對馬島，彼俗頑獷，無禮義，設有不軌，將如之何？’是以，與俱而還。且日本素與小邦，未嘗通好，但對馬島人，時因貿易，往來金州耳。小邦自陛下即祚以來，深蒙仁恤，三十年兵革之餘，稍得蘇息，綿綿存喘。聖恩天大，誓欲報効。如有可爲之勢，而不盡心力，有如天日。”〕(高麗史 卷26 世家 26, 元宗 8年(1267) 正月)

2) 癸丑日、モンゴルからヒズル(黒的)と殷弘などを派遣し(次のような)詔書を送ってきた。「今や貴国の人趙彝(ちょうい)がいうには『日本は高麗と近い隣国であり、典章(制度や法律)や政治に賛美するに足るものがあります。漢・唐の時代以来、あるいは使いを派遣して中国と通じてきました。』と述べた。だから今黒的らを日本に派遣して友好関係を結ぼうと思うので、貴国は使節団がその地に到着できるように案内し、東の国の人たちを悟らせ、中国の義に慕わせるようにせよ。このことはそなたが責任をもって風浪の險阻を理由にしたり、以前日本とは通行がないとか、彼らが命令に従わず使臣を拒否するかもしれないなどと言いつけるな。そなたの忠誠心はこのことで明らかになるであろうから格別に努めよ」〔癸丑 蒙古遣黑的・殷弘等來，詔曰，“今爾國人趙彝來告，‘日本與爾國爲近隣，典章政治，有足嘉者。漢唐而下，亦或通使中國。’故今遣黑的等，往日本，欲與通和，卿其道達去使，以徹彼疆，開悟東方，向風慕義。茲事之責，卿宜任之，勿以風濤險阻爲辭，勿以未嘗通好爲解。恐彼不順命，有阻去使爲托。卿之忠誠，於斯可見，卿其勉之。”〕(高麗史 卷26 世家 26, 元宗 7年(1266) 11月 癸丑 (25))

以上の事例をみると、高麗は外交的に日本を招諭することになった状況に対し、とても困惑しながらこの問題を最大限に回避しようとしていたと思われる。もし日本が外交的招諭に応じて、モンゴルに降伏すれば幸いだが、そうでない場合、モンゴルが戦争をしてでも日本の降伏させようとするのは自明なことであり、その戦争に高麗が直・間接的に関与することになるのも自明だからだ。さらに、日本の反応も降伏に対しては否定的であろうということはある程度予想できる。この点は、1268年に高麗が日本に送った国書のうち、「急に他の形式の服を着た人たちと一緒に海を渡っていけば、貴国が私たちの意図を疑うのではないかと思う。＜中略＞クビライの命令を拒めず、モンゴルの使臣を海側まで連れてきたが、風浪が険しいといういいわけで時間を引っ張り結局戻っていった。これは我国が貴国に対してどんな考えを持っているのかを示すものである」(鎌倉遣文no. 9845 高麗國牒狀案)をみてもわかることだ。

そして、引き続き第1次征伐を準備する過程で高麗はモンゴル側に戦争準備のための負担が高麗が準備するには無理な量であることを何度も訴えた。

### 3. 第2次征伐を巡る忠烈王の意図

第2次征伐の過程では、以前とはちがった様相が出てくる。今までモンゴルが高麗に日本の招諭を要求していたならば、今や逆に高麗で日本征伐を先に持ちかけている。次を見てみよう。

3)王が次のように言った。「日本は一概の島に住む東夷で、地勢が険しいことをいいことに帰順しないで、なんと王のなさることに抵抗しています。臣が思うに（皇帝の）徳に報いることがないので、願わくばまた船を作り、穀物を集めて（日本を）罪に問いて討伐すれば必ず成功するでしょう」。皇帝曰く、「王は戻って宰相たちと深く議論してから人を遣って話させよ」と言った。〔王又奏曰，“日本一島夷耳，恃險不庭，敢抗王師，臣自念，無以報德，願更造船積穀，聲罪致討，蔑不濟矣。” 帝曰，“王歸與宰相熟計，遣人奏之。”〕（〈高麗史〉 卷28，忠烈王4年(1278)7月甲申(3)）

忠烈王はクビライに対し、高麗が先に日本を征伐することを提案しているが、事実彼がクビライに日本の征伐事業をけしかけているようなものだといえよう。もちろん、この対話はすぐに高麗—モンゴル間に懸案として台頭していた金方慶冤罪事件を解決しようとする中で、モンゴルが元々やりたがっていた日本征伐を高麗が積極的に応える行動をとっている過程で出てきた出来事である。とにかく、この言葉の中には日本征伐という事業を高麗がある程度負担できるという前提があつてのことであり、できるだけ負担を避けようとしていた第1次征伐の時と最も大きな違いだともいえる。

だとすれば、日本征伐を巡って第1次までと第2次の時の高麗の態度に変化が生まれたのはなぜだろうか。では、その点について調べてみようと思う。第2次征伐に忠烈王が以前より積極性を見せた理由については、大体高麗がモンゴルとの関係を好転させさらに一步進んで洪茶丘など、高麗にいるモンゴルの勢力をけん制するために仕方ないものと把握している。もちろん、こうした点を否定することはできず、大きく見てこうした解釈が間違っているとも思わない。但し、これは当時高麗側の政治的背景は説明できるが、態度の変化の直接的な理由というには多少不足している。

国王の立場で高麗—蒙古という国家間の関係だけでなく、他の側面も考慮していたと思われる。

こうした観点から、まさに第1次征伐と第2次征伐を準備した主体である高麗国王の違いがより直接的な理由と思われる。元宗と忠烈王は親子関係であり、100年間続いた武臣政権のせいで王権が弱化した状況から王権を回復させようという傾向があったという点では同じだ。しかし、モンゴルを理解、受け入れる部分では違いがあり、次のエピソードがその点をよく表している。

4) 西北面に国王が挙動して公主(姫)を迎えた。順安公悰、廣平公諲、帶方公激、漢陽侯僎、平章事・兪千遇、知樞密院事・張鎰、知奏事・李汾禧、承宣崔文本・朴恒、上將軍・朴成大、知御史台事・李汾成がついて行った。(a)王(忠烈王;筆者)が汾禧などに対して弁髪しないことを責めると、答えは「臣が弁髪にするのを嫌がっているのではなく、他の人たちが一緒にやってくれることを待っているだけです。」と、答えた。モンゴルの風俗に頭頂部から額まで四角くし真ん中のところの毛髪だけ残してそり上げるが、モンゴル語で「ケグル(怯仇兒)」と言った。王は元に入って朝会をするときにすでに弁髪をしていたが、国人はまだやっていたいなかったのでそれを叱ったのである。後に宋松禮と鄭子璵が弁髪をして朝会をすると他の人たちも皆それに従った。以前 印公秀が元宗に元の風俗に従って服飾を直すことを勧めると、(b)元宗が「吾はととも祖宗の法を急に変えることはできないので、吾が死んだ後に君たちが勝手にやりなさい」と答えた。〔幸西北面，迎公主。順安公悰廣平公諲帶方公激漢陽侯僎平章事兪千遇知樞密院事張鎰知奏事李汾禧承宣崔文本朴恒上將軍朴成大知御史臺事李汾成從行。王責汾禧等不開剃，對曰，“臣等非惡開剃，唯俟衆例耳。”蒙古俗，剃頂至額，方其形，留髮其中，謂之怯仇兒。王入朝時已開剃，而國人則未也，故責之。後，宋松禮鄭子璵開剃而朝，餘皆效之。初，印公秀勸元宗，效元俗，改服色，元宗曰，“吾未忍遽變祖宗之法。我死之後，卿等自爲之。”〕(高麗史節要 卷19 忠烈王 卽位年(1274) 10月)

上述したのは1274年に斉国大長公主が高麗に入国する際に忠烈王が彼女を迎えに行つて、モンゴルの風習によるヘアスタイルである弁髪のことから起きた逸話である。(a)と(b)は、弁髪に対する元宗と忠烈王の立場を対比させている。(b)で見られるように元宗は弁髪をはじめ服飾を蒙古式に変えることはできないとし、臣下たちに自分が死んだ後にしてほしいという。反面、(a)で忠烈王は他の人たちより先に弁髪をしてはまだ弁髪をしていない李汾禧を叱っている。これは忠烈王が父である元宗よりも積極的に蒙古の影響を受け入れようと努力したものと理解される。

また、第2次征伐を提案、準備する過程で忠烈王の言及を詳細にみる必要がある。忠烈王は征伐を準備する過程で、7つの要請をした。

5) 王が7つの項目に対して要請をした。「1. 耽羅を守っている我国の軍隊を東征軍に補

充させること、2. 高麗軍と漢軍を減らし、闍里帖木兒(チェリテムル)にモンゴル軍をもっと徴兵させて出征すること、3. 洪茶丘の職任をもっと高めず彼が成功するのを待って賞を与えること、また闍里帖木兒に臣たちと共に日本遠征に関する仕事を管掌させること、4. 我国の軍官に皆牌面を下賜すること、5. 漢地の海辺の人たちを梢工(船頭)と水手(水夫)に充てること、6. 按察使を派遣し民の苦情を把握すること、7. 臣が直接合浦(今の昌原馬山)に行つて、兵士と馬を点検して送ること」であった。皇帝が「建議したものをすべて受け入れる」と言った。[王以七事請, “一, 以我軍鎮戍耽羅者, 補東征之師, 二, 減麗漢軍, 使闍里帖木兒, 益發蒙軍以進, 三, 勿加洪茶丘職任, 待其成功賞之, 且令闍里帖木兒, 與臣管征東省事, 四, 小國軍官, 皆賜牌面, 五, 漢地濱海之人, 并充梢工水手, 六, 遣按察使, 廉問百姓疾苦, 七, 臣躬至合浦, 閱送軍馬.” 帝曰, “已領所奏.” ] (高麗史卷29世家 29, 忠烈王 6年(1280) 8月 乙未(23))

6) 我国の兵士と民たちは早くから珍島、耽羅、日本の3カ所で何度も戦功を上げたにも関わらずまだ賞をもらってないので、願わくば以前の戦功を調査してそれぞれ牌面を下賜して、後代の人たちに勧めてほしいです。兵士1,000人ごとに摠管と千戸各1名、摠把各2名であり、下記のように氏名を列举します。願わくば上將軍・朴之亮、大將軍・文壽、羅裕、韓希愈、趙圭、親從將軍・鄭守琪、大將軍・李伸、朴保、盧挺儒、安社ら10名を摠管に、大將軍趙抃、將軍安迪材、許洪材、金德至、徐靖、任愷、金臣正、李廷翼、朴益桓ら10名を千戸に、中郎將 柳甫、金天祿、李臣伯、辛奕、崔公節、呂文就、安興、李淳、金福大、車公胤、李唐公、郎將朴成進、高世和、中郎將宋仁允、郎將玉環、桂富、金天固、李貞、徐光純、咸益深ら20名を摠把にすることを願います。[小國軍民, 曾於珍島·耽羅·日本三處, 累有戰功, 未蒙官賞, 伏望追錄前功, 各賜牌面, 以勸來効. 每一千軍, 摠管千戸各一, 摠把各二, 花名, 抄連在前. 請以上將軍朴之亮, 大將軍文壽·羅裕·韓希愈·趙圭·親從將軍鄭守琪·大將軍李伸·朴保·盧挺儒·安社等十人爲摠管. 大將軍趙抃, 將軍安迪材·許洪材·金德至·徐靖·任愷·金臣正·李廷翼·朴益桓等十人爲千戸, 中郎將柳甫·金天祿·李臣伯·辛奕·崔公節·呂文就·安興·李淳·金福大·車公胤·李唐公, 郎將朴成進·高世和, 中郎將宋仁允, 郎將玉環·桂富·金天固·李貞·徐光純·咸益深等二十人爲摠把.] (高麗史卷29世家29, 忠烈王6年(1280)11月己酉(11))

上述の記録を見ると、忠烈王は高麗の大將たちにモンゴルの官職を要請しており、また対象の候補者も提示している。このように高麗軍の武將たちに対しては萬戸の任命や牌面の下賜などを忠烈王が積極的に要請している。これはモンゴルの官職などの授与が高麗王の要請の下で行われていたことを物語るもので、忠烈王の狙いが強く込められているものと言える。

だとすれば、忠烈王の意図は何なのか。まず、彼の要請のうち、洪茶丘の昇進を制限し功績を

待って褒賞することを提示しているの、洪茶丘をけん制しようとする意図を表している。さらに、表面的にはモンゴルとの同一な官職名を使って一元的な指揮体系を構築しながらも、事実上高麗軍をモンゴル軍から分離して指揮をする上での混乱を避け、実際には高麗軍の指揮府の人選過程で自分が直接介入しようとする意図として理解される。

こうした忠烈王の要請をクビライはすべて受け入れ、高麗に虎符などを下賜した。これに忠烈王は金方慶をはじめ、高麗の武将たちにモンゴルの官職名と印章を次のように下賜することができた。

7) 元の皇帝が国王を冊封し、開府儀同三司中書左丞相行中書省事に冊封し、印信を下賜した。また、金方慶を中奉大夫管領高麗軍都元帥に、知密直司事の朴球・金周鼎を召勇大將軍左・右副都統に任命し、皆に虎頭金牌と印信を下賜した。趙仁規を宣武將軍・王京斷事官兼脫脫禾孫として任命して金牌と印信を下賜し、朴之亮など10名を武德將軍・管軍千戸に任命して金牌と判子を下賜した。趙朴ら10名を召信校尉管軍總把に任命し、銀牌と印信を下賜し、金仲成など、20人を忠顯校尉管軍總把として任命した。〔帝冊王爲開府儀同三司中書左丞相行中書省事，賜印信。又以金方慶爲中奉大夫管領高麗軍都元帥，知密直司事朴球・金周鼎爲召勇大將軍左右副都統，並賜虎頭金牌・印信。趙仁規爲宣武將軍王京斷事官兼脫脫禾孫，賜金牌・印信，朴之亮等十人爲武德將軍管軍千戸，賜金牌及印，趙朴等十人爲召信校尉管軍總把，賜銀牌及印，金仲成等二十人爲忠顯校尉管軍總把。〕（高麗史卷29世家29、忠烈王6年(1280) 12月辛卯(23)）

そして、金方慶、朴球、金周鼎は1281年3月、合浦に軍隊を率いて出ており、この時のモンゴルの官職任命が日本征伐のための編成過程の所産であったことがわかる。つまり、忠烈王が高麗の武将たちにモンゴルの官職名を任命してくれることを要請し、これが受け入れられた。そして、このようにモンゴルの官職名を持った高麗の武将たちが第2次日本征伐に参加している。これを見ると、この時忠烈王が官職をモンゴルに要請した意図は、モンゴル軍と同じ指揮体系を構築して自分の影響力を行使することにあつたと推測できる。

このような様相と関連しては、忠烈王が萬戸など、モンゴルの官職や金牌などの地位を「下賜」する形を借りて軍の統帥権を確立しようとする意図から出たと考えられる。これを通じて忠烈王はモンゴルの官職に対する一種の人事権行使を通じて統帥権の掌握、さらには彼らの忠誠心まで確保した。つまり、萬戸などの地位の任免や与奪など人事権を通じて国王の臣僚に対する掌握力を高めたといえる。

そして、もう一つ考えてみるのが征東行省の存在である。征東行省がモンゴルが日本征伐の



ために設置した軍司令部の性格をもった軍前行省という点はすでに古くから指摘されていた事実である。1280年に第2次征伐の準備過程で設置された征東行省は、今度は高麗に置かれ、忠烈王が征東行省の丞相に任命された。つまり、モンゴルは1280年6月頃に日本征伐に対する議論をはじめ、1280年10月には忠烈王を征東行省の左丞相、同年12月に右丞相に任命した。そして、日本遠征が終わった1283年6月には、また忠烈王が征東中書省の左丞相に任命されてアタカイ[阿塔海]と共に征東行省の仕事を一緒に処理した。今や、忠烈王は、征東行省内でも最も高い地位にいることができた。

高麗の官職だけを持った大多数の高麗の官人たちに高麗王は唯一の命令権者であり、一国の支配者という地位を無理なく認められることができた。しかし、行政官など、モンゴルの管制に編入された高麗出身の官人たちに高麗王は「唯一の」君主ではなかった。現実的にモンゴル皇帝の地位と影響力がより大きかった。そのため、高麗王はモンゴル官僚体系内の高位職を確保し、さらに行省の人事に影響力を発揮できる行省の丞相という地位が切実であった。これを通じて最終命令権者は、形式上はモンゴルの皇帝であったが、高麗王が萬戸、總管など軍官をはじめモンゴルの官職に高麗官僚たちを推薦して任命できる形を作り上げることができた。そうすることで、高麗王はモンゴルの官吏である高麗人と君臣関係を維持することができた。まさにここに第2次日本征伐に積極的であった忠烈王の政治的目的があったといえよう。

#### 最後に：結論の代わりに

忠烈王は、モンゴルの皇帝の駙馬（皇帝の娘婿）でありながら、征東行省の丞相の一人で高麗国王、駙馬（皇帝の娘婿）、丞相という3つの地位を持っていた。これを通じて彼は高麗内で、そしてモンゴルの官人との関係で自身の地位を確保していくことができた。これのために忠烈王は、モンゴルの日本征伐、特に第2次征伐を積極的に活用したと言える。

結果的に忠烈王の意図は、それなりに成果を上げたと評価できる。しかし、彼はその後「ナヤン乱」の過程で平壤に出て行き、クビライに助軍の意志を明かしたりもするが、これは彼がモンゴルで占める王室の一員であるという地位を維持するためには必然的な行動であった。言い換えれば、モンゴルに依存して王権の地位を確保、強化しようとしていた忠烈王の選択は高麗の政治・外交的なスタンスを限定させる結果をもたらした。